

博士論文（要約）

中学校教師が抱く信頼感と情動コンピテンスが  
職場環境を介して生徒への指導行動に及ぼす影響

2022 年度

東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻

古田 伸子

# 博士論文（要約）

## 1 題目

中学校教師が抱く信頼感と情動コンピテンスが職場環境を介して生徒への指導行動に及ぼす影響

## 2 全体要旨

本研究では、中学校教師が自己や他者に抱く信頼感（自分や他人を安心して信じ頼ることができる気持ちである信念）と情動コンピテンス（自己や他者への情動を同定・理解、表現、調整、利用する能力）に焦点をあて、職場環境を介して生徒への指導行動にどのような影響を及ぼしているのか明らかにすることを目的とした。全国の公立中学校に勤務する一般教諭（研究1～3は382名、研究4～6は433名）を対象に、質問紙調査・インターネット調査、インタビュー調査を行い、量的データに質的データを収斂させる混合研究法により分析を行った。

研究1と研究4の結果から、信頼感や情動コンピテンス、職場環境との関係に年代差が示された。また、同僚からのソーシャルサポートや学校組織風土の違いが信頼感や情動コンピテンスに影響を与えていることが明らかとなった。信頼感や情動コンピテンスを類型的に捉えた結果、自他への信頼および情動コンピテンス自己領域を高く認知している群が、職場の協働的風土を認識しやすいことが示された。

研究3では生徒への指導行動尺度を作成し、信頼感類型別の特徴を分析した。生徒認知の方法や指導行動に違いがあることが示された。

研究5では、新たに中学校の職場環境調査尺度を作成した。また、管理職の影響についても検討した。管理職の温かな声かけや励まし・笑顔が日常的に教師に伝わり、問題発生時には管理職が責任をとると表明し確かな指示を出すことで安心感や信頼感につながり、若い教師の「こうなりたい」というロールモデルになっていた。

研究6では、職場環境を媒介要因として、信頼感と情動コンピテンスが生徒への指導行動に及ぼす影響を検討した。その結果、信頼感の否定的側面は、協働的風土であれば生徒への親和的・共感的な指導が促進されることが示され、教師がネガティブな感情を抱いていても、教師集団の支え合いや高い職務意識がある職場では、生徒志向的な指導が高まることが明らかとなった。一方で、情動コンピテンス他者領域は、協働的風土にあると生徒への親和的・共感的な指導が減少した。情動コンピテンス他者領域は、他者の情動を利用する能力が含まれているため、協働的風土と認知すれば、生徒志向的な指導を未熟な教師に意図的に任せ、教師としての成長を促すなど教師集団の戦略的な意味が推察された。

本研究の意義は、現職教員および教員養成段階で自己理解を深めるための研修や指導に活用したり、指導に困難を抱えた教師にスクールカウンセラーがコンサルテーションを行う場合、教師の内的特性を把握する視点にしたりするなど、実践的意義と学問的意義が考えられた。本研究は、一般成人対象の尺度を使用したため、対人援助職である教師を対象とした尺度開発や、混合研究法における調査方法および分析において、量的・質的データを平等に重みづけして論じることができたかという点に限界と課題があると考えられた。

### 3 目 次

#### 第Ⅰ部 序 論 問題の所在と研究の目的

##### 第1章 中学校における生徒指導上の問題と中学校教師がおかれている現状と課題

###### 第1節 中学校の生徒指導上の諸課題と対応する教師の現状

###### 第2節 教師と生徒の関係における諸課題

##### 第2章 信頼と情動に関する先行研究の概観と本研究で捉えた教師にお

###### ける信頼と情動の位置づけ（先行研究1）

###### 第1節 信頼に関する研究の分類

###### 第2節 教師における信頼研究の問題点と本研究における「信頼」の位置づけ

###### 第3節 教師が抱く信頼感と自己や他者に対する情動との関係

##### 第3章 生徒への指導行動に関する本研究の位置づけと学校組織研究の現状（先行研究2）

###### 第1節 生徒への指導行動に関する研究状況と本研究における指導行動の位置づけ

###### 第2節 学校組織風土に関する研究の動向と本研究における位置づけ

##### 第4章 本研究の目的と基本概念の定義および研究の意義

###### 第1節 研究の目的と構成

###### 第2節 基本概念の定義

###### 第3節 研究の意義

#### 第Ⅱ部—1 本 論 1 教師が抱く信頼感と生徒への指導行動に関する研究

##### 第5章 教師が抱く信頼感の状態と影響を及ぼす要因についての検討（研究1）

###### 第1節 目的

###### 第2節 方法

###### 第3節 結果

###### 第4節 考察

##### 第6章 教師が抱く信頼感と生徒への指導行動との関連についての検討（研究2）

###### 第1節 目的

###### 第2節 予備調査

###### 第3節 本調査

#### 第4節 考察

### 第7章 教師が抱く信頼感類型別の信頼感についてのエピソードと生徒への指導事例に関する質的検討 (研究3)

#### 第1節 目的

#### 第2節 方法

#### 第3節 結果と考察

|   |
|---|
| 第Ⅱ部-2 本論2 教師が抱く信頼感と情動コンピテンスが生徒への指導行動に及ぼす影響と関連<br>要因に関する研究 |
|---|

### 第8章 教師が抱く信頼感と情動コンピテンスとの関連についての検討 (研究4)

#### 第1節 目的

#### 第2節 方法

#### 第3節 結果

#### 第4節 考察

### 第9章 教師が認知する職場環境と信頼感および情動コンピテンスとの関連についての検討 (研究5)

#### 第1節 目的

#### 第2節 予備調査

#### 第3節 本調査

#### 第4節 職場環境における管理職の影響に関する質的検討

#### 第5節 考察

### 第10章 教師が抱く信頼感と情動コンピテンスが職場環境を媒介にして生徒への指導行動に及ぼす影響 についての検討 (研究6)

#### 第1節 目的

#### 第2節 方法

#### 第3節 結果

#### 第4節 考察

|                |
|----------------|
| 第Ⅲ部 結論 本研究のまとめ |
|----------------|

### 第11章 本研究の総合的考察および結論

#### 第1節 本研究の主な結果のまとめ

#### 第2節 本研究の総合的考察

### 第3節 本研究の实践的意義と学校心理学における学問的意義

### 第4節 本研究の限界および今後の課題

## 引用文献

## 資料

## 4 各章要約

### 第I部 序論 問題の所在と研究の目的

#### 第1章 中学校における生徒指導上の問題と中学校教師がおかれている現状と課題

近年、中学校における生徒指導上の問題は深刻な状況にあり、ますます複雑・多様化している。社会的な困難が継続している中で、教師は子供たちが社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支えていかなければいけない(文部科学省, 2022c)。こうした背景がある中、教師は、年代に限らず生徒指導上の諸課題、保護者や地域との関係、同僚教師との関係において困難な対応を求められ、これまでに得てきた知識や経験だけでは十分に対応できないことがある。対人援助職にあつては、必ずしも決まった正解がない事例が多く、終わりが見えにくく目に見える成果を実感しづらいことで、迷いや不安を抱きながら長時間・長期間にわたり対応していることが指摘され(文部科学省, 2013)、やむなく休職や離職に至っていると言える。

生徒指導上の諸課題においては、教師と生徒との関係形成の在り方が対応をさらに困難化させ、教師の精神的負担感を増大させるとともに、生徒の学校適応に大きな影響を及ぼすと考えられる。教師が生徒との信頼関係を構築することは、生徒にとっても教師自身にとっても重要な課題である。社会の困難な課題や多様化・複雑化する生徒指導上の問題がある中、教師と生徒との信頼関係構築を教師の個人レベルの努力によって解決していくには課題も多いと考えられる。そのため、教師と生徒との関係形成の基盤となる「信頼」について改めて問い直し、教師と生徒の相互的な信頼関係について考えてみる必要があるのではないだろうか。

#### 第2章 信頼と情動に関する先行研究の概観と本研究で捉えた教師における信頼と情動の位置づけ(先行研究1)

「信頼」に関する研究は、主に、(1)ある条件下の対人場面における相手からの反応についての予測である期待(信頼性)、(2)個々人が発達していく過程の様々な場面で影響してくる抽象的な確信や信念(信頼感)の2つに分類される。学校教育における教師と生徒の関係では、学習指導要領(文部科学省, 2017)や生徒指導提要(文部科学省, 2022c)において、信頼関係構築のための生徒指導の視点が示され教師役割の重要性を指摘している。また、中央教育審議会(2012)では、社会からの尊敬・信頼を受ける教師が求められているという指摘もあり、教師に求められている「信頼」とは、教師という職業に対する役割期待、つまり信頼に値する行動をとる「信頼性」である。しかし、学校は様々な個性をもった教師の集合体であり、生徒との関係形成や指導方法には違いがある。久富(2008)は、教職アイデンティティの関与について指摘している。教職アイデンティティとは「自分は教師としてやれている」という自己イメージであり、安定(教育活動に関わる自信)と攪乱(疑念や信念)により構成されている(長谷川, 2008)。教師が教育

活動を通して肯定的体験を積み重ねて、自信ややりがいを身に付けることで教職アイデンティティを確保していく一方、うまく乗り切れなければ否定的自己イメージを抱き、教職アイデンティティを喪失することを指摘している。そして、教師と生徒との信頼関係構築にあたって、教師がこうした教職アイデンティティを確保し、自信をもって生徒の前に立つことが重要であると示唆している。本研究においては、信頼される教師という役割ではなく、教師をしている人間という観点から信念としての「信頼感」を把握することとした。その際、天貝（2001）が定義した信頼感である「自分自身や他人を安心して信じ頼ることができる気持ち」を、教師が抱く「信頼感」として位置づけ、教師が「日常生活のなかで身近に接する人全般」や「自分自身」に対して感じる信頼できる気持ちを通して、生徒との関係形成にどのような関連があるのかを検討する。

教師にとって生徒理解は信頼関係構築の根本であるが、日常の生徒とのかかわりの中で、教師自身の感情や信念といった無意識下の影響の調整と対応は、自己の情動管理を行った上で生徒とのコミュニケーションを深化させていくことにつながる重要な能力の一つと言える。教師は対人援助職であるため、生徒のみならず保護者や同僚など多くの他者とのかかわり合い、湧き起こる様々な情動を調整し、その中で専門性を身につけていくと考えられる。しかし、こうしたかかわりが教師の精神的負担感を増大させている要因の一つであり、学校現場での大きな課題となっている。教師の実践場面における情動管理においても、基盤となるのは一般成人としての「情動コンピテンス」（自己や他者の情動を認識し調整する能力）の状態に気づくことではないだろうか。本研究では、野崎・子安（2015）によって検討された情動コンピテンスに着目し、一般的な信頼感とともに職場環境とどのような関連があるのか、そして生徒への指導行動にどう影響するのか、信頼感や情動コンピテンスの強さやバランスによる指導行動の違いを量的研究により明らかにする。

### 第3章 生徒への指導行動に関する本研究の位置づけと学校組織研究の現状（先行研究2）

教師が生徒に対して行う日常の指導は、管理して統制する場面、受容してなだめすかす場面、自立を促すために支持をしたり考えさせたりする場面など、教師は生徒の状態を認知して、その時々で指導行動を混合させ様々な表出の形をとりながら行うことが必要であると考えられ、指導スタイルに分類しきれない複雑さがあるのではないだろうか。弓削（2008, 2012）は、小学校教師に期待される2つの矛盾した指導性機能として、「ひきあげる機能」と「養う機能」の2つのカテゴリーを示した。中学校教師が行う生徒への指導についても、学習指導や進路指導など現実的な課題達成が求められる側面と、思春期特有の不安定な時期における人間関係への配慮や維持が求められる側面が考えられる。本研究では、弓削（2008, 2012）が作成した教師の2つの指導性機能に対応する指導行動尺度に着目し、中学校教師にふさわしい指導行動尺度を新たに作成し直し、教師が抱く信頼感および情動コンピテンスと指導行動との関連を量的な側面から検証するとともに、具体的な指導事例を通して意識化された生徒との関係性について、質的な側面からも検討を加え特徴をまとめる。

また、教師相互の関係性や職場の雰囲気、教師と生徒との信頼関係形成のための指導行動に重要な意味をもつと指摘できる。したがって、本研究で捉える教師の個人内特性である信頼感や情動コンピテンスに影響を及ぼす要因として、学校組織風土を検討する。また、チーム学校で示された学校組織の在り方を踏まえ、中学校教師が認知する職場環境という視点から、学校組織風土尺度（淵上, 2005）を現在の状況

に応じた項目内容に心理的安全風土を加えて検討しなおし、教師が抱く信頼感や情動コンピテンス、生徒への指導行動との関係を検討する。加えて、教師が認知する管理職の発言・態度の職場環境への影響についても質的検討を行い、量的研究結果に収斂させ明らかにする。

#### 第4章 研究の目的と基本概念の定義および研究の意義

本研究の目的は、①教師が自己や他者に抱く信頼感と情動コンピテンスの属性および類型的な違いを把握し、②信頼感や情動コンピテンスが生徒への指導行動にどのような影響を及ぼしているのかを検討する。その際、中学校教師の生徒への指導行動尺度を作成および構成概念を明らかにする。さらに、③信頼感や情動コンピテンスへの影響要因である中学校の職場環境との関連を検討した上で、生徒への指導行動にどのような関連があるのか明らかにする。その際、中学校の職場環境調査尺度の作成および構成概念を明らかにするとともに、教師が認知する管理職の影響についても検討を加える。そして、それらの研究結果から得られた知見を基にして、教師が自己や他者に抱く信頼感および情動コンピテンスが意味するもの、中学校における職場環境の様相と管理職の影響、信頼感および情動コンピテンスと職場環境が生徒への指導行動に及ぼす影響の観点から考察し、具体的に提案することである。

また、本研究の意義として、①教師自身が自己や他者に感じる信頼感に気づいたり、情動コンピテンスの状態を認知したりすることで、生徒との関係形成のみならず教育実践において知識や思考といった側面からだけでなく、情動的側面からのアプローチを検討することができる。②様々な状況の職場環境でチームとして組織的・協働的に取り組む上でも、自身の特性を認識し強み・弱みを踏まえて協働していくことで、より能力を発揮しやすくなるため、本研究で得られた結果を、教員研修で生徒とのかかわりを省察し指導方法を検討する際の資料としたり、教員養成の場で教師を目指す学生が自己理解を深める際の資料としたりして活用することができる。③中学校における職場環境の状況を考える上で、本研究で得られた知見を参考にして、協働的な職場環境づくりの推進を図ることができる。以上3点が考えられる。

### 第Ⅱ部ー1 本論1 教師が抱く信頼感と生徒への指導行動に関する研究

#### 第5章 教師が抱く信頼感の状態と影響を及ぼす要因についての検討（研究1）

A 県内の公立中学校に勤務する中学校教師 382 名を対象に質問紙調査を行った。信頼感の状態について、年代・性・勤務年数・学校規模など属性による違いを把握し、教師のライフコースの観点から検討する。また、信頼感の発達においては、肯定的側面である「自分への信頼」「他人への信頼」と、否定的側面である「不信」を類型的に捉えることが重要であるとされていることから、「自他への信頼」と「不信」のバランスを分類し、年代による出現状況を検討する。さらに、同僚からのソーシャルサポートや学校組織風土など職場環境と、教師自身の信頼感との関係についても検討する。教師が抱く信頼感の状態と影響を及ぼす要因として同僚からのソーシャルサポートと学校組織風土との関係を検討した。その結果、信頼感と職場環境の関係に年代差が示され、教師が抱く信頼感は年代ごとに変化し、その要因として同僚らのサポートや学校組織の雰囲気が関係していることが示唆された。

## 第6章 教師が抱く信頼感と生徒への指導行動との関連についての検討（研究2）

中学校教師の生徒への指導行動の属性による違いを把握し、研究1の結果から得られた教師が抱く信頼感とどのような関連があるのかを検討する。また、信頼感と職場環境との間に関連がみられたことから、生徒への指導行動と職場環境との関係について、信頼感の肯定的・否定的各側面のバランスから分類した類型ごとに検討する。生徒への指導行動尺度は、予備調査を行い作成した。「共感し理解する指導」「距離をおく指導」「統制し主導する指導」「助言を与えずに待つ指導」「尊重する指導」の5因子が抽出された。信頼感4群による違いでは「自他への信頼」が高い群が、生徒に寄り添い関わる指導（「共感し理解する指導」）をより多く行い、「自他への信頼」が低い群が（「距離をおく指導」「助言を与えずに待つ指導」）をより多く行っており、教師が抱く信頼感の強さやバランスによって、生徒への指導行動に違いがあることが示された。また、20歳代や30歳代は、50歳代に比べ「距離をおく指導」「助言を与えずに待つ指導」を行いやすいなど、年代による指導行動の違いも示された。

## 第7章 教師が抱く信頼感類型別の信頼感についてのエピソードと生徒への指導事例に関する質的検討（研究3）

研究1の結果から得られた教師が抱く信頼感を4類型に分類し、各対象者が想起した信頼感についての様相を検討する。また、生徒への指導事例についても、研究2で得られた量的データと研究3の質的データとを、混合研究法による収斂モデルを用いてまとめ、各類型に属する対象者の具体的な指導行動の特徴を明らかにする。教師が抱く信頼感の強さやバランスにより、生徒への指導に対する考え方や行動に違いがあることが示された。また、同僚教師のサポートの受け入れやすさ、学校組織風土による影響されやすさにも違いがあることが示された。

## 第II部-2 本論2 教師が抱く信頼感と情動コンピテンスが生徒への指導行動に及ぼす影響と関連要因に関する研究

### 第8章 教師が抱く信頼感と情動コンピテンスとの関連についての検討（研究4）

教師は日常の生徒とのかかわりにおいて様々な情動が生起されるため、状況に応じて自己調整し行動していかなければならない。研究4では中学校教師の「情動コンピテンス」に着目し、属性による違いや信頼感との関係を明らかにする。全国の公立中学校に勤務する主幹教諭・一般教諭433名を対象にインターネットによる質問紙調査を行った。情動コンピテンスは、自己や他者の情動を同定・理解・表現・調整・利用する能力と定義されている。信頼感との関係においては、自他への信頼だけでなく不信にも正の関連が示された。年代別では、30歳代・40歳代・50歳代・60歳代が、自他への信頼と情動コンピテンス自己領域と一貫して関係がみられた。中年期以降の自他への信頼の強さは、自分自身の情動理解・表現など情動管理に関係していることが示された。

### 第9章 教師が認知する職場環境と信頼感および情動コンピテンスとの関連についての検討（研究5）

中学校教師が所属する職場環境をどのように認知しているかを把握し、研究4の結果から得られた教師が抱く信頼感と情動コンピテンスとの関係や信頼感と情動コンピテンスの類型ごとの職場環境認知の特徴を検討する。また、職場の環境づくりには管理職の影響が大きいと考えられるため、この点についても



検討を加える。研究1で使用した学校組織風土尺度は、中学校の職場に適した調査項目にするためを作成し直した。その結果、協働的風土と同調圧力的風土の2因子が抽出された。自他への信頼や情動コンピテンスをポジティブに捉えている群は、職場を協働的と捉えており、不信や情動コンピテンス他者領域を強く認知している群は同調圧力的と捉えやすいことが示された。また、12名の一般教諭に職場における3つの場面（「教職員同士の人間関係」「日常の生徒への指導」「生徒の問題行動発生時の対応」）での管理職の影響についてインタビュー調査を行った結果、管理職の気づきや温かな声かけ、励ましで安心感を抱いたり管理職への感謝の気持ちにつながっていたりした。生徒への指導では、任せる支えるなど教師を後方支援することで、嬉しく思ったり心強く思ったりしていた。生徒指導上の問題発生時の対応では、責任の所在が管理職にあると明確に教職員に伝え、冷静にしかも的確な指示をすることで頼もしく思ったり安心感を抱いたりしていた。一方で同調圧力的風土に分類された内容は、教師との会話が少なく、感情的で、指示がトップダウンになることで、教師は管理職の顔色を見て行動するようになり、不安や不満を抱くようになっていた。

## 第10章 教師が抱く信頼感と情動コンピテンスが職場環境を媒介にして生徒への指導行動に及ぼす影響についての検討（研究6）

教師の個人内特性の一部である信頼感と情動コンピテンスが、生徒への指導行動にどのような影響を及ぼしているのかを検討する。その際、研究5で検討した職場環境の関与についても検討を加える。生徒への指導行動尺度（古田・五十嵐，2018）を用いて分析した結果、自他への信頼は、「気づき働きかける指導」「共感理解し支える指導」など生徒志向的な指導を高めていた。また不信は「距離をおき任せる指導」「助言を与えずに待つ指導」を高めていた。情動コンピテンスは自他領域ともに、全ての指導行動因子を高めていたが、他者領域は中でも「距離をおき任せる指導」「助言を与えずに待つ指導」との関連がみられた。職場環境を媒介すると、どのような影響があるかを検討した結果、不信は協働的風土を媒介すると、「気づき働きかける指導」「共感理解し支える指導」「主体性を尊重する指導」が向上した。情動コンピテンス他者領域は、協働的風土にあると「気づき働きかける指導」「共感理解し支える指導」が減少した。また、他人への信頼は同調圧力的風土にあると、「距離をおき任せる指導」が有意に転じた。同僚らに頼りにくい雰囲気と認知することで、生徒に対しても介入しない指導行動をとりやすくなると示された。

## 第Ⅲ部 結論 本研究のまとめ

### 第11章 本研究の総合的考察および結論

本研究結果から得られた知見を総合的に考察し、次の3点にまとめる。

#### ①教師が抱く信頼感と情動コンピテンスの意味

本研究結果から、初任時から熟達期にいたる教職経験の中で、信頼感や情動コンピテンスが生涯発達的に変化していくのではないかと考えられた。特に、教師が所属する職場においてサポートしてもらえる同僚がいることや、互いに自分の考えを主張し合い、高い目標をもって取り組める教師集団であれば、信頼感や情動コンピテンスを高めることができ、生徒へも親和的・共感的・志向的な指導を行いやすくなり、そうした実践的経験が教職アイデンティティの確保と安定（長谷川，2008）、教師としての成長につながると考える。一方で、同僚からのサポートを受けにくかったり自分の考えを主張できにくかったりして、

周囲に過度な気を遣わなければならない教師集団の中では、不信が高まり他者に対する情動判断や表出に影響を与え、生徒へも懐疑的で心理的距離をとるような指導を行いやすくなる。その結果、教師自身の指導観とずれが生じた場合は、教職アイデンティティの攪乱と喪失（長谷川，2008）により教師としての成長が阻まれてしまう可能性も考えられる。

学校現場において教師が抱く信頼感や情動コンピテンスは、「自分は教師としてやっている」という教職アイデンティティの確保と安定、そして教師としての成長・発達を支えるために意味をもつ個人的要因の一つであるが、職場環境の様相に影響を受けやすいものであると言える。

## ②中学校教師が認知する職場環境の様相と管理職の影響

中学校における職場環境の様相は、協働的風土と同調圧力的風土で構成されていた。協働的風土は自他への信頼や情動コンピテンスを高め、同調圧力的風土では自他への信頼を低め不信を高めることに加え、情動コンピテンス他者領域も高まることが示された。他者領域は周囲の状況を見て行動するためと考えられる。こうした職場環境を作り出す背景には、管理職の教師に対する態度や行動が影響していることが示唆された。職場内での人間関係や日常の生徒への指導場面では、管理職の何気ない温かな声かけや励まし、少しの変化にも気づき反応する、生徒との心理的・社会的距離が近いこと、指導する教師を見守る姿勢と助言（反応）があることなど、教師との間にささやかではあるが、温かな気遣いがあるコミュニケーションが日常的に行われており、教師の安心感や職務意識・意欲が高まっていた。また、生徒の問題行動が発生した場合には、管理職として責任の所在（「責任は校長がとる」といった発言）を明確に伝え、教師を信頼して任せることができるといえる態度、冷静に判断して対応する姿などを個々の教師がしっかり認識することで、管理職のリーダーシップ力・マネジメント力を感じ、頼もしさや「こうなりたい」という教師モデルとして認知していた。一方で、教師とのコミュニケーションが少なく、些細な変化の気づきや発信がない上に、トップダウンで指示がある場合には、不信感を抱きモチベーションの低下や「こうなりたくない」という逆説的教師モデルにつながっていた。

## ③中学校教師が抱く信頼感・情動コンピテンスと職場環境が生徒への指導行動に及ぼす影響

信頼の肯定的側面や情動コンピテンスは、生徒に対して親和的・共感的・生徒志向的な指導が促進された一方で、信頼の否定的側面である不信は、生徒志向的な指導行動は抑制されていた。しかし、職場が協働的風土であると認知することで促進された。教師はこれまでの人生において、様々な形で不信を抱きながらも生徒に対峙することがあると想像できるが、職場が協働的な環境であると認知すれば、不信はあつたとしても同僚らに支えられながら、積極的に生徒に向き合い教師としての役割を遂行するのだと考える。また、興味深いのは、情動コンピテンス他者領域が協働的風土を媒介することで、「気づき働きかける指導」「共感理解する指導」への影響が有意でなくなった点である。協働的な雰囲気の中で教師間に信頼関係があれば、若い教師や未熟な教師を育てるために、あえて生徒志向的な指導を任せるといった教師間の多様な戦略を行いやすくなるとも考えられる。生徒の成長を促し、生徒を気遣い支える指導を促進させるために、教師は信頼感の肯定的側面の安定をはかること、情動コンピテンスの獲得・向上を図ることの必要性が示唆される。また、たとえ不信を抱いていたとしても、職場の協働的な雰囲気があることで生徒志向的な指導が促されるため、管理職を中心とした職場環境づくりの推進が示唆された。

また、本研究においては、次のような限界と課題が考えられた。①本研究で使用した一般成人を対象とした信頼感尺度や情動コンピテンスプロフィール日本語短縮版が、教師が抱く信頼感や情動コンピテンス

を十分に反映していただろうかという点である。加えて、本研究の調査を行う直前に、新型コロナウイルス感染症の爆発的な流行が重なり未曾有の事態に陥った。これを契機に、学校閉鎖や教育活動の縮小、ICT教育の早期導入などにより、学校現場はこれまで経験したことがない状態となった。そのため、本研究で開発した生徒への指導行動尺度では測れない内容もあったかもしれず、本研究の限界と言える。今後は、こうした社会的な困難や教師がおかれている立場を踏まえた上で、中学校教師が生徒との関係形成のために行っている指導行動尺度を、再度、開発していく必要があり今後の課題である。②量的調査結果と質的調査結果の統合（収斂）とその解釈において、質的データが論じるに値する調査数であったかということや、両方の調査結果を平等に重みづけして論じることができたかという点に限界と課題があると考えられた。今後は、これらの点を考慮したさらなる検討が必要である。

## 5 主な引用文献

- 天貝由美子（2001）. 信頼感の発達心理学 ―思春期から老年期に至るまで― 新曜社
- 淵上克義（2005）. 学校組織の心理学 日本文化科学社
- 長谷川裕（2008）. 5カ国の教師たち、その教職アイデンティティ確保戦略 久富善之（編）教師の専門性とアイデンティティ―教育改革時代の国際比較調査と国際シンポジウムから―（pp. 79-132） 勁草書
- 久富善之（2008）. 「改革」時代における教師の専門性とアイデンティティ 久富善之（編）教師の専門性とアイデンティティ―教育改革時代の国際比較調査と国際シンポジウムから―（pp. 15-25） 勁草書
- 文部科学省（2017）. 【総則編】中学校学習指導要領解説
- 文部科学省（2022）. 生徒指導提要
- 野崎優樹・子安増生（2015）. 情動コンピテンスプロフィール日本語反収判の作成 心理学研究, 86(2), 160-169
- 弓削洋子（2012）. 教師の2つの指導性機能の統合化の検討 ―機能に対応する指導行動内容に着目して― 教育心理学研究, 60(2), 186-198